「英語、英語習得、そして和製英語に見る一視点」

金　谷　良　夫

言葉は生きている。そして、言葉は変化を続けているといってよい。国の内外を問わず、あるいは洋の東西を問わず、言葉には変化が見られる。２００３年の６月の『ジャパンタイムズ』紙によると、『オックスフォード英語辞典』の最新版では21世紀を反映して新たに６０００語が加わったし、また、アメリカで毎年さまざまな出版社から出ている年鑑にもアメリカで新たに英語の語彙として加わる言葉が多数見受けられる。日本においても、『イミダス』、『現代用語の基礎知識』あるいは『知恵蔵』等を見ても言葉の表現の変化が窺える。なかでも話し言葉においては、そうした変化は著しいのではないだろうか。

１９７０年代の後半、シェークスピアの作品の著名な翻訳者であった福田恒存は、『朝日新聞』において日本語の中に、「食べれる、寝れる、見れる」といった「ら抜き言葉」は、文法的に間違っており、不自然だと日本語の乱れを指摘していた。それが現在どうなっただろうか。四半世紀以上経った今、例えば民間放送局をはじめとしてＮＨＫのアナウンサー（稀ではある）までもがこの「ら抜き言葉」を使うこともあるのが現状であることから、それはもはや日常茶飯時の表現になってしまったと言っても過言ではない。２００３年６月の『朝日新聞』によると、文化庁が「国語に関する世論調査」から８割の人が「言葉の乱れを感じる」ということである。「あしたは休まさせていただきます」といった「さ入れ言葉」があらたに現れたり、「カタカナ語は１２０語を示して意味を理解しているかどうかを調べ.....半数を超える６９語で理解率５０パーセントを下回った」という嘆かわしい結果がでている。こうした言葉が長生きできるかどうかは後になってからでないと判明しないが、過半数の人々は「ら抜き言葉」や「さ入れ言葉」に抵抗がないというアンケートの結果もある。別な観点から言えば、言葉の流行廃れについて例えば『現代用語の基礎知識』に四半世紀前に載っていた「話がピーマン」（中身がからっぽ）、「話がパルコ」（訳が分からない）、「加山雄三」（優が３つで可が山ほどある）などの滑稽な流行語は最早死後だし、英語においても、１９７０年代に、流行っていた「カッコイイ」という意味でよく使われた“far-

out, fantastic”などはほとんど使われなくなっている。

実際、外来語が日本語に溶け込むまでには時間がかかるため、新しい表現が生まれては消滅するといったサイクルが常に続いているということもできる。むしろ、意味が分からない、あるいは曖昧模糊とした表現を使いたいときに、たとえばカタカナ語を使うことも多いのではないだろうか。外来語の意味が徐々に分かりにくくなってきている昨今、どの外来語、特にどの英語を使うのかが問題になる。換言すれば、時代や社会の要請により特に広く受け入れられている言葉を使うことが肝要だ。しかし、やはり可能な限り正しく、美しい日本語を使うべきである。

今は、世界の国々との距離がいろいろな意味で近くなり、たとえば２００４年現在のイラクの情勢やアメリカのスポーツの情報が瞬時に入って来るし、世界の事情がどうなっているかを知ることができるさまざまな国の情報が一定のテレビ局から現地の言語で入って来る時代だ。こうしたことは一昔前では考えられなかった。なかでもアメリカの情報が最も多くたとえば複数のテレビ局から入ってきており、したがって、必然的に英語の情報が最も多くなる。イギリスの放送も入って来る。端的に言えば、その結果英語が日本語にかなりの影響を与えているといっても差し支えない。一例をあげれば、英語の「コミュニケーション」という言葉を正確な日本語一語に置き換えることは不可能だろうから、それをカタカナ語として日本語に加えざるを得ない。したがって、われわれはこうした変化に上手に対応し適切な表現を見極め、そして受け入れせざるを得ないのである。

別な角度から見れば、英語を習得することを通して世界が見えてくると言うことができ、そう考えれば、英語の習得がものをいうことになる。

次に、英語の習得の方法および和製英語の周辺を考えてみたい。英語の習得に関する効果的方法に関して、一言で言えば「根気よく続ける」ことだが、まず英語の習得の目的と目標を定め必要がある。これは神奈川大学が新入生に毎年読むことを課している『学問への誘い』(１９９８年)において、「英語を何の目的で、どういう目標を定めるかを決めることが肝要であり、そうした目的・目標を達成するためには、英語の発音、文法、および語彙に力を入れ、『継続は力なり』を念頭に置き、金も惜しまないことを慫慂したい。英語を漫然と勉強していても力はつ

かないし、発音が悪ければ通じないばかりか音声のイメージも湧かないし、語彙力、文法力がなければ豊かな表現をすることはできない。」と述べた。そして英語という言葉のみを勉強するのではなく、それを道具として何かを掴むことが重要だということ。その意味でこの目的や目標がないと困る。アメリカの作家マーク・トウェインは、“Words realize nothing, verify nothing to you, unless you have suffered in your own person the thing which the words try to describe.”「もしあなたがみずから、言葉が語ろうとするものを経験しなければ、言葉は何も実現させてくれないし、何も立証してくれることはなのだ」と述べている。すなわち、この一文の内容に照らせば本質的な何かがなければ、語学の学習は意味がないということである。

例を挙げれば、英語は今や国際語と言えることから、その学習目的が日本の文化を友人を通して世界に発信することでもよいし、英字新聞を毎日読むことでも、あるいは海外旅行で英語を使うことであってもよい。英語を書く力や話す力と異なり、読解力は自分独りでかなりのところまで伸ばすことが可能である。とにかく英語学習によって世界が見えるようになると言える。

これまで英語学習の効果的な方法に関してはさまざまな考えがあり、最良だと言うものを、ここで述べられればよいが、筆者の乏しい経験や知識からすれば、Practice makes perfect.(習うより慣れよ)の精神が肝要だ。最近１００万語を辞書も引かずに、それぞれのレベルごとに読み進めていけば英語が楽に読めるようになるとか、英字新聞を毎日よく読む習慣をつければよいとか、英語のテレビ番組やラジオ番組を根気よく聞き練習すれば英語が話せるようになるとか、パソコンを通して上達する、あるいは何と言っても英語圏に直接行って勉強することが一番よいなど、その効果的方法はさまざまある。もちろん、個人の置ける環境によってどれを実践に移すかはある程度決まってくるが、例えば全ての人が英語圏に行って自分を英語漬けにして勉強することができるとは限らない。だとすれば、その人にあった方法を選ばなければならない。しかし、いずれの方法も活用できる。取りも直さず「継続は力なり」がポイントである。

さて、英語の習得とは、英語の読解の力（英語が読めること)、英作文の力（英語が書けること)、そして英会話の力（英語を聞き話せること）をいうが、本稿では、特に英会話上達の効果的な方法を考えよう。

ただ、注意すべき点は、今述べた英語の読解の力、英作文の力そして英会話の力はいずれも関連があり、連動しているといってもよい。つまり、英語の４技能と言われる「読む、書く、話す、聞く」を総合的に勉強することが理に適っている。

会話力の効果的上達法も言うまでもなく「訓練がすべて」だ。日本は英会話学校が栄えるところとして世界でも類稀なる国だ。「駅前留学」というような言葉でさえ使われている。英語教育の専門家でないネーテイヴスピーカーでさえ、日本でその職にありつけることは今や容易だろう。しかし、先に触れたように、母語でない英語に熟達するために最も効果があがる方法は、英語圏に行って英語を磨くことだが、行けばよいというものではない。現に筆者の知る日本人は３０年以上アメリカで生活しているにもかかわらず、英語を使うことがあまりできない。何故できないかといえばアメリカ人と積極的に交わらなかったからである。その人は自分の専門には人一倍長けており、その道では大へん有名な芸術家であるが、それについてアメリカ人の言うところでは、彼は英語があまりできないためにアメリカ人との意志の疎通がままならず友達ができなかったのである。あるいは、アメリカの日系企業に５年間務めていても、ほとんど英語を使わなかった日本人もいた。筆者の所属する大学では、これまで多くの英語圏からの帰国子女を見てきているが、残念なのは、ちょっとした英会話力はすばらしいのだが、文法を把握していないために、誤った表現をしている人がかなり目立つ。それはたとえば、アメリカの高校を日本人が卒業しても、卒業するまでにあまり文法の習得に時間をかけなかったということである。尊敬されるような英語を話さなくてもよいが、軽蔑されるような英語を使うことは避けたいものである。

要は、訓練がすべてだ。英語によるコミュニケーション能力の習得とは永遠の訓練だということが言える。「英会話力が上達する一番の秘訣は何か」と聞かれれば、訓練しかないと答えたい。逆に言えば、Easy come, easy go.（悪銭身につかず）であって、簡単に得られるものは、簡単に出ていってしまうのが常である。

ところで、われわれは英語の発音の重要性をもっと強調しても強調しすぎることはない。ある意味で、英語が上手だと言われる所以は発音が上手だということができる。だからこそ発音は極めて重要だ。筆者がアメリカにいるとき、ある日本のパッケージツアーに途中から参加し、アメリカのバスの運転手とアメリカ在

住５年という日本人のツアーガイドの３人がレストランでデザートを食べることになり、ウエイターが来てわれわれの注文をとり、そのツアーガイドだけは、バニラアイスクリームをバナナアイスクリームと誤解され通じなくて結局、ストロベリーアイスクリームを頼む羽目になり地団太を踏んだことを垣間見た。筆者自身にも冷や汗をかいた経験が何度もある。ツアーガイドのアルバイトをしたとき、「ツアーガイド」という（発音上の）和製英語が「トアガイ」としか聞き取れず相手にフラストレーションを与えてしまった。これは英語に由来する外来語の発音が英語本来の発音の妨げになっていたと言うべきである。特にアメリカにおいて、発音は極めて重要であると実感できる。発音に関しては発音の発想転換が必要である。

発音を上達させるための効果的方法は、英語の発想に立って発音することが肝要である。つまり、注意が必要なことは、概して日本語の発音のアクセントは高低、英語の発音、特にアメリカ英語の発音は強弱が基本だということ。イギリス英語の発音はどちらかというと高低であろう。

『カタカナ英語の話』（加島祥造）によると、「英語風の声のほうが雑音率が少ない、反面日本人の発声は、肺から送られる空気の力が弱いうえに、声官を通って出るときに.....雑音をうんとまじえてしまう」から、胸を張って、顎を引いて発音すればよいということである。日本語のリズムと英語のリズムとは違うから、英語のリズムをつかむことが先決だ。加えて、イントネーションやスピードも英語の発想に変える必要がある。日本語は平板で、やわらかく、比較的強弱の度合いも少ないが、英語はリズミカルな音による言語だと言える。日本語の母音は５つしかないのに対し、英語には基本母音だけで１２あり、そして二重母音を加えればかなりの数に上る。また、日本語は概ねイタリア語のように基本的にやわらかい「子音プラス母音」の構造になっているが、英語はそれとは対照的に基本的にかたい「子音プラス子音」、「子音で終わる」構造になっていることが多い。この意味で、たとえば、日本語によるロック音楽は不向きで、日本人であってもロックを歌うなら英語にした方がよいといえよう。すなわち、たとえば、rock は日本語ではロック music はミュージックであるから、それぞれ前者はかたく、後者はやわらかいので日本語はロックには適しないというのが筆者の持論である。

他の例としては、英語のアクセントは基本的に母音にあるから、そのアクセン

トを少々オーバー気味に発音することがよいだろう。例えば、よくジョークで言われるが、ファーストフードのマクドナルドはドナルのところを「怒鳴っ」てMacDonaldとアクセントをつければアメリカ人に通じ易くなるだろう。そして、子音については日本人の不得意な「Tokyo Gサウンド」というものがある。これは英語を教える日本人はあまり指摘しないが、たとえば、I am goingのgoingを「んぐ」と鼻から息を出す感じで発音するとよいだろう。さらに、[ｓ]と[ｓｈ]の音の違いを克服することだ。この克服は気を付ければ容易である。練習の例を挙げれば、She sells seashells by the seashore.の「ス」と「シ」を区別すること。人はCity Hotelには泊まるが「シティホテル」には泊まりたくないものだ。

発音もつまるところ「訓練がすべて」だ。マーク・トウェインは次のように述べている。“I have traveled more than anyone else, and I have noticed that even the angels speak English with an accent.”「わたしは誰よりも多く旅をし、天使でさえも訛りのある英語を話すことに気付いたのだ」であるから、完璧に通じさえすれば、日本人訛りの英語を話しても何ら問題はないので、自信を持って英会話の習得に勤しむことである。

次に、文法について考えよう。「文法が命」という考え方が成り立つ。「日本人は英語が下手だ」と、日本にいる英語のネーテヴスピーカーがいうのをよく耳にする。では、その人たちの日本語はどうなのかと問いたくなることもある。とかく人は自分のことは棚にあげるのが常である。日本人は英語が下手だと言われる理由は、繰り返せば第一が発音で第二は文法が理解できていないことだと考えられる。英会話力アップの決め手は、ある意味では文法であり、スポーツにたとえれば「基礎技術」にあたると考えられるので、基礎技術がしっかりしていればいるほど、きちんとした力が発揮でき、またすばらしいパフォーマンスにも繋がる。文法は、楽器の習得の基礎技術や自動車の運転免許証に譬えることも可能である。後者を例に取れば、ゴルフ場でゴルフカートを運転する際でも無免許の人の運転技術は、免許を持っている人の技術に比べかなり劣る。無免許では事故を起す確率は高く、最悪のケースは事故死ということになり兼ねない。文法を覚える事は運転免許証の取得と似ており、一旦覚えてしまえばあとは練習によってその技術はますます上達するものである。

いくら文法が大切だといっても、間違えることはよくあること、To err is

human, to forgive, divine. であるから、間違いを恐れることなく英語を根気よく話す訓練も大切なことだ。かつて言われたことであるが、「長島英語」と「王英語」があり、長島英語は間違いを恐れず積極的に使っていく、それに対し王英語は完璧な英語が浮かばないと口を閉ざすと言う方法である。結論から言えば、どちらかに決める必要はなく、それぞれよい面を取り入れ、両方の方法を共に使っていけばよい。繰り返せば、要は軽蔑されるような英語を話さなければよいことを肝に銘じ肩の力を抜いて話すことである。ところがブロークンな英語を話しても一向に気にしない場合もあるが、それは大きな支障を来すことになり兼ねない。

以前、日本人のある有名で知的な女優があるテレビのトーク番組で次のようなことを言っていた。その人はあるアメリカ人男性と交際していたとき、「私といると退屈ですか」というつもりで、Are you boring? と言って、相手の人は怒って帰ってしまったが、何故そうなったのかそのとき彼女には分からなかったそうだ。しかし、その理由が後になって分かったときは, もう 既に遅し、だったそうである。当然、彼女は Are you bored? というべきだったのである。Are you boring? と言っては全く逆の意味になってしまう。「私をうんざれさせているのですか」になってしまう。Is my topic boring?「私の話題は退屈ですか」であれば、立派に使える。もしかしたら、文法の知識如何によって人生が変るかもしれない。

第三に、大切なのは英語の語彙の豊富さが実を結ぶことだ。「愛があれば言葉なんかいらない」と言うかもしれないが、語彙に関する限りこれは理想にしかすぎないだろう。コミュニケーションを深めるためには何らかの手段が必要で、言葉が第一の手段であるならば、やはり語彙を増やすことが重要課題である。とにかく語彙は一朝一夕には増やすことはできないので、根気よく努力することが最良の方法である。執拗に繰り返すが、毎日少しずつ英語の学習を続けることが「継続は力なり」に繋がるのである。

最後に、和製英語とその周辺を見てみたい。和製英語とは、文字どおり日本においてできた言葉であり、英語のネーティヴスピーカーにとって理解しにくいもので、英語ではEnglishとJapaneseとの合成語としてJaplish、もしくはJanglishといわれる。所謂カタカナ語の多くがこれに相当する。

最早、地球規模で生きて行かなければならないわれわれは、外来語、つまり言

い換えればカタカナ語とうまく付き合っていくしかないのである。日本語は今どういう局面にあるのか。カタカタ語無しでは日本語はもはや成り立たなくなっているのかもしれない。それは例えば、日本には元来ない世界の情報やものが定着したり即刻入ってくるからでる。ある意味では日本語は危機を迎えているのかもしれない。そうだとすると、今から３００年後は英語のような日本語に変っているかもしれないし、あるいは自然に外来語が淘汰されていくのかもしれない。それは時代のみぞ知ると言わざるを得ないが、カタカナ語がますます増えていくような傾向は否めない。要するに、われわれが美しい日本語を守るという意識をしつつ外来語を上手に使っていくということが大切だろう。また、その意識をはっきりと持つのと持たないのとではかなりの違いが生じることは自明の理である。

和製英語に関して、カタカナ語を増やす第一の媒体はマスコミュニケーションといってよい。だから、その与える影響は極めて大きく、われわれの言語活動において和製英語は大きな意味を持つ。加えて、和製英語が使われる理由は、加島祥造が述べるように、「西洋崇拝意識のせいもあったろうが、もうひとつ、カナ書きの便利さを日本人が敏感に活用」すること、さらに「新しいもの好き」などが考えられる。

和製英語の特徴として、和製英語と元の英語の発音が全く違う言葉、意味が異なる言葉、日本独自の言葉がある。英語の発音について、先に触れたように、この和製英語の発音が英会話の妨げになることが多々ある。筆者は、かなり前にアメリカに行ったとき、ファーストフード・レストランで「フライドポテト アンド ミルク」と言い、店員が怪訝な顔をしていたので、和製英語だったと考え直して、英語で “French Flies and milk, please.” と言って笑われたことがある。Friesの[r]に注意すべきところをFliesと [l]の発音にしてしまい、それでは「蝿」になってしまうので、おかしいのは当然である。そのときは既に、It's no use crying over spilt milk.”「覆水盆に返らず」であった。繰り返せば、発音は正確にしたいものだ。

先ず、日本人がよく使う和製英語で、発音が違うものとして、適例をあげれば、キャリア組、キャリア・ウーマンなどの「キャリア」の正しい発音は、career(カリア)である。メジャーリーグはmajor（メイジャア）leagueだし、容量という意味のキャパシティはcapacity、ロボットはrobot(ロウボット)、ストライキは

strike,ナルシズムはナルシシズム、チームはteam、チケットはticketなど数多くあるが、ここではすべて日本語による正しい発音は表記できない。発音が違ってしまう理由は、三つ考えられる。一つは、最初にマスコミなどが間違って普及させること、二つ目は日本人に発音しにくいものを日本流に発音してしまうことだ。そして三つ目は短縮した略語である。これでは英語を母語としている人にとって分かり難くなるのは当然である。むしろこれは逆にいえば、日本語学習者にとって、日本語のこの部分がかなり難しいと言われる所以である。とにかく、このように発音の紛らわしい例は枚挙に遑がないが、可能な限り英語の発音を崩さずに、受け入れざるを得ない言葉は元の発音を変えたくないものである。

意味が違う言葉を見てみよう。ワイシャツを例に取ると、一説によるとそれはWhite shirtを繰り返し早く言ったものであるが、ワイシャツは正しくはdress shirtである。ドクターストップ、ボーイ（ウエイター)、マンション（コンド、アパート)、など。この例も数多くある。

次に、日本人は言葉の「省エネ」を頻繁に行うので、英語の言葉の一部分だけを使う「省エネ語」(筆者の造語)がある。この種の言葉も夥しく存在する。バイクは英語では自転車の口語表現でありmotorcycle/motorbikeをいう。ワープロ、パソコン、オフレコ、オンエアー、エアーコン、アポ、コネ、コンペ、ダイヤ、ビル、レジ、ギャラ、ロケ、メカ、コンビニ、リストラ、マスコミ、ネット、デパート、アパート、ドラコン、テロ、ルビ、リハビリ、キャラ等々。

そして、先の例のような「省エネ」などの日本語と英語の混成語がある。例を挙げれば、デパ地下、カラオケ、高画質テレビ、電気スタンド、魅力アップ、おもしろいのはチョベリバ(最早死語？)、ドタキャンなど。メントレ、「英語でしゃべらナイト」(テレビ番組名)、作業チーム等々。ラジオのアナウンサーが２００３年夏に、市役所ではノーネクタイ、「ノー上着」に....、と聞いたときには耳を疑った。さらに、「マイ.....」、マイカー、マイカップ、などから「マイ上着」、などと使う人がいる。

そのほか、ドイツ語と英語の混在した言葉もある。一番愉快なのは、フリーターだ。フリーアルバイターが最初にできそれを短くしてフリーターとした。アルバイトはもともとドイツ語だ。フリーは英語。独語のアルバイトに英語の“er”をつけた言葉である。これと同じようにパートタイマー（英語）という言

葉もある。ところで、「学生がアルバイトをする」ことは普通の表現だが、「学生がパートをする」とは普通言わないし、主婦がアルバイトをするというと意味深長な表現になる。こうした表現にはほとんど一貫性はなく奇怪である。

三番目に、日本においてしか通じ得ない日本独自の和製英語が存在する。その代表例が、モーニングサービスやナイター（これらは今や死語になりつつあるか）だ。モーニングサービスを英語で訳せば、「朝のお祈り」で、ナイターは英語ではナイトゲームである。この派生語には「ナイター設備のあるテニスコート」という場合の例などがある。そのほか、キャッチボール（Play catch）、トレーナー（sweat shirt）、ガソリンスタンド（gas station）等々。しかし、広く一般に受け入れられている言葉は譬え和製英語であっても日本語のなかに入れなければならない場合もでてくるだろう。その際、あくまでも正しいコンテクスト（意味合い）のなかで、なおかつ正しい意味で、使うべきだということは言うまでもないことである。

このほか序に言えば、無論、英語以外の言葉も認識できよう。たとえば、オランダ語で言えば、コップ、ゴム、ガラス、ホック、ピント、エレキ、インキ、チンキ、アルコール、タラップ、アンモニア、プラチナ、アルカリ、ビール、ガスなどが挙げられる。ドイツ語にはエネルギー、デマゴギー（デマ）、アイゼン、カルテ、ハロゲン、ヒステリー、テーマ、アンチテーゼ、ゲバルト、ストック、ゲレンデ、ナフタリン、アドレナリン、ヒエルラアキーなどがある。フランス語ではアラカルト、ズボン、レジメ、アンサンブル、バロック、コンクール、バレー、アップリケ、アトリエ、ブルジョア、コロッケ、グルメ、フィアンセ、ピーマン、ピエロ、メゾンなど。ポルトガル語ではキリスト、ボタン、パン、カステラ、ビードロ（ガラス）、カナリア、カルタなど。イタリア語ではアルト、チェロ、マカロニ、ミネストローネ、バレリーナ、アーカペラ、テンポ、アレグロなど。ラテン語ではウイルス、アロエ、アドホック、エトセトラなどのように数多くみられる。

ところで、英語で名前を付けることについて述べたい。先に述べた文化庁のアンケートによればカタカナ和製英語の意味の理解率が５０パーセントを下回ったということは、人が和製英語を使うとき本当に意味が分かって使っているのかどうかの疑問が残る。こうした憂いを鑑み、国立国語研究所が２００２年の８月に、「外来語」委員会をつくり、さらに２００３年の４月の朝日新聞にあったように、

外来語の言い換えの第一回分に関して62語について最終案を発表した。それは、たとえば、インフォームドコンセントを「納得診療、説明と同意」、セカンドオピニオンを「第２診療」ガイドラインを「指針」、インパクトを「衝撃」というようにしている。ただ、なかには「セカンドオピニオン」と「第２診療」とを比べた場合、後者はわれわれの耳に馴染みが薄い言葉であるので、むしろ、カタカナ語を使ったほうが分かり易いという皮肉な結果になる言葉も少なくないということは問題だということもできる。

では、なぜカタカナ語が頻繁に使われるのか。先に述べたように、日本人は欧米の文化を崇拝する傾向にあるのと同時にその方が便利だと考えるからではないだろうか。また、特に若者には言いまわしとしてその方が「カッコイイ」（ナウイは最早死語か）、その方が人の心を捉えると言うことができるからであろう。それが証拠には、最近では、映画のタイトルはほとんど、原語のままか、あるいはカタカナで表わされている。これは、２００３年放送のＮＨＫの「クローズアップ現代」において取り上げられたことである。企業でも、「日本語の枠を超えた名前をつけたい」と考えているという。もちろん同時に、これは商品を世界市場へ向ける意味もあるのである。

だとすれば、日本人は、カタカナ語や英語で名前を付けることについてもっと注意を払わなければならない。最近は、一般に見かける意味不明の表現が多い。ある看板に「.....カウンターサービス」と書いあったが、その意味内容は不可解だ。何かの飲み物に“creep”を入れるのはよくないだろう。汗をかいたときに“.....sweat”はどんなものだろうか。“Flesh Meat” を売ることは不可能だ。

つまるところ、いま世界の国々との距離が近づくにつれ、われわれがより一層注意しなければならないことは、正確な意味を捉えずにカタカナ語を使っていると、かならず何らかの支障が出るのは明らかだということである。したがって、われわれは完全に理解し，咀嚼してからそうした言葉を使い、なおかつ誰にとっても素直に受け入れられる言葉として日本語のなかに組み込む必要があるのである。

付記　拙稿は２００３年６月、神奈川大学公開講座において、「言葉がわかれば世界が見える」と題して話したものを基にしている。

参考文献

『カタカナ英語の話－英語と日本語をつなぐバイパス』加島祥造(南雲堂　１９９４)

『コミュニケーションのための英語・再入門-English Grammar for Communication』金谷良夫（中央経済社　１９９３）

「出会いと知的生活のすすめ」『学問への誘い-大学で何を学ぶか』金谷良夫（神奈川大学広報委員会　１９９８）